

文学資料コーナー
過去の展示のご案内

2019.5.7 ↓ 2019.7.15	大西民子の生い立ち	大宮ゆかりの歌人・大西民子の生い立ちの解説や、直筆の色紙・短冊等を展示
2019.7.16 ↓ 2019.9.15	大西民子と、ふるさと岩手	民子が自身の故郷、岩手を題材に詠んだ歌の原稿を展示
2019.9.16 ↓ 2019.11.15	明星派の世界 ～北原白秋から大西民子への系譜～	民子の師の系譜にあたる、雑誌「明星」の歌人たちの歌を紹介
2019.11.16 ↓ 2020.1.15	大西民子の冬のうた	民子が、「冬」を題材に詠んだ歌の原稿や、色紙を展示
2020.1.16 ↓ 2020.3.1	大西民子と『万葉集』	民子が管理に携わった埼玉県立文化会館の「万葉植物園」と、埼玉が舞台の万葉集の歌について紹介

大宮図書館
館長からのひとこと

2019年5月7日、大宮図書館がリニューアル開館してから一年が経ちました。多くの方々が様々な用途でこの建物に訪れ、新たな発見や学ぶことの楽しさを感じて、にぎわいを起こしています。

文学資料コーナーでは大宮市(現・さいたま市)で活動をつづけた歌人・大西民子や、さいたま市ゆかりの作家を中心とした企画展を行っています。今後も魅力的な展示をしていくことで、色々な年代の方々が集い、楽しめる場所であり続けたいと思っています。



馬淵忠秀館長

イラスト：©仲佳

2020.6.1 発行
さいたま市立大宮図書館
さいたま市大宮区吉敷町 1-124-1
電話 048-643-3701

大宮図書館 開館一周年記念展示

与謝野晶子と大西民子
～民子が憧れた歌人・与謝野晶子～

2020年6月1日(月)～9月6日(日)

1	手作り歌集『ひとり生きたし 歌の集』より 「かよへる 夏の海と君を え忘れぬ ゝろよわさよ あまたすべなき」
2	原稿「私の晶子体験」
3	原稿「大いなるつばさ」
4	与謝野晶子の第一歌集『みだれ髪』
5	短冊「やは肌の あつき血汐に ふれも見で さびしからずや 道を説く君」
6	雑誌「明星」第2号(復刻版)
7	合同詩歌集『恋衣』
8	短冊「かまくらや 御佛なれど 釋迦牟尼(しゃかむに)は 美男におはす 夏木立かな」
9	与謝野晶子自選歌集『麗日抄』より 「夕やけの くれなゐの雲 限りなく 乱る中の うつくしき月」
11	短冊「加茂川の 石皆ぬるる むつかしと 人をよぶなり 六月の雨」
12	掛軸「波のごと うしろに帰る 心なく よするがまゝの 白き花びら」

1 『みだれ髪』との出会い

民子の師・木俣修きまたおさむは、与謝野晶子と同じ「明星」に参加していた北原白秋きたはらはくしゅうから歌を学びました。木俣は晶子を、短歌を近代化させた立役者として高く評価しています。

民子が晶子の歌に触れたのは、奈良女子高等師範学校一年生の時でした。ある日、学校の図書館で『みだれ髪』の初版本を見つけ、夢中で読むと同時に書き写していたそうです。当時は太平洋戦争の最中で、恋の歌を読むことが憚られる風潮だったため、寄宿舎の同室の生徒に見つからないように、ひっそり食堂で書き写した時もあったと回想しています(No.3)。

2 民子の晶子像

民子は、短歌雑誌で企画された与謝野晶子特集に度々寄稿していました。その中のひとつ、雑誌「短歌」に寄せた“大いなるつばさ”では、学生時代に一番好きだった「やは肌のあつき血汐に〜」について触れています。山本健吉著『日本の恋の歌』の晶子論を引用しながら、内縁の妻と子がいた鉄幹は、晶子の恋心を理解しつつもあきらめてほしいと思っていた時期があったのではないかと推測し、この歌は、それでも鉄幹との恋を諦めたくない、晶子の思いが込められているのではないかとしています。また、自分が結婚・離婚といった人生経験を積んで、晶子の気持ちが分かるようになった気がするとも書いています(No.3)

一方、雑誌「短歌研究」の特集“私の晶子体験”では、晶子の歌からは女性の生き方の激しさ、歌の生命力の強さを感じさせられたと言ひ、晶子が一歩才能と勇気を持った女性だったとしています(No.2)。

3 晶子の恋と歌

与謝野晶子(本名:志よう)は、1878(明治 11)年 12 月 7 日に現在の大阪府堺市で生まれました。尋常小学校卒業後、晶子は 1888(明治 21)年、堺区堺女学校(現・大阪府立泉陽高等学校)に入学します。知的好奇心が旺盛だった晶子は、学校から帰ると、読書に勤しむ文学少女でした。

地元の堺敷島会に入り、自分の歌を発表していた晶子は、与謝野鉄幹の歌を目にして感銘を受け、1900(明治 33)年に鉄幹が創刊した、詩歌を中心とする月刊文芸誌「明星」に参加します。

晶子はしだいに妻子のいる鉄幹に恋心を抱くようになり、堺を飛び出して東京の鉄幹の元に身を寄せました。そして、1901(明治 34)年、晶子は恋への情熱を詠んだ歌を載せた第一歌集『みだれ髪』を刊行します。女性が恋愛を歌にすることなど考えられなかった当時、ありのままの恋心を歌ったこの歌集は、激しい賛否両論を巻き起こしました。

4 晶子の生涯

1902(明治 35)年、晶子は鉄幹と結婚し、「明星」も晶子の『みだれ髪』の人気もあって多くの参加者が集まりましたが、やがて北原白秋や吉井勇などの若手歌人の離脱が相次ぎ、1908(明治 41)年、100 号をもって終刊となってしまいます。失意の鉄幹は、1911(明治 44)年ヨーロッパ遊学に旅立ちました。晶子も、森鷗外の援助を得て鉄幹の後を追ひ、ヨーロッパ各国をともに訪ね歩き、それぞれの文化を学びます。

帰国後、晶子は社会評論など、歌以外の分野でも精力的に活動するようになります。また、教育制度にも興味を持ち、1921(大正 10)年、鉄幹らとともに私立学校「文化学院」の創立に携わりました。

ところが、1935(昭和 10)年、最愛の夫・鉄幹が亡くなると、晶子も過労により体調を崩しがちになります。そして、二回目の脳溢血を起こした際に半身不随になり、闘病中だった 1942(昭和 17)年に 63 歳で永眠しました。

与謝野晶子と「明星」の歌人たち

「明星」派

与謝野鉄幹(1873~1935)



短歌近代化運動を進め、新詩社を創立。月刊文芸誌「明星」を創刊、主宰し、若い詩歌作家を育てる。

与謝野晶子(1878~1942)



鉄幹を慕い「明星」に参加。素直に恋心を詠んだ最初の歌集「みだれ髪」が賛否の嵐を巻き起こす。

山川登美子(1879~1909)



「明星」に参加し、晶子の親友にしてライバルとなるが、父の勧めた縁組に従う。29歳の若さで死去。

北原白秋(1885~1942)



「明星」に参加するもほどなく脱退し、「スバル」刊行に参加。歌人、詩人、童謡作家として活躍する。

石川啄木(1886~1912)



鉄幹・晶子を師と仰ぎ「明星」に参加。後に、三行書の歌集「一握の砂」で注目を集めるが、26歳で早世。

平野万里(1885~1947)



「明星」に短歌、詩、翻訳など多数発表。鉄幹・晶子夫妻の晩年に寄り添った。

師弟

木俣修(1906~1983)



学生時代から白秋に師事し、白秋主宰の「多磨」に参加。白秋の歌風をつぎ、自らも「形成」を主宰する。

師弟

大西民子(1924~1994)



大宮に在住した歌人。木俣に入門し、「形成」に参加。「形成」解散後は、「波濤」を結成する。

イラスト：©仲佳

参考文献

- 『近代短歌の花—評論集—(現代歌人叢書別巻)』木俣修/著 短歌新聞社 1973年
- 『日本の恋の歌』山本健吉/著 講談社 1979年
- 『晶子鑑賞』平野万里/著 三省堂 1980年
- 『与謝野晶子の秀歌(現代短歌鑑賞シリーズ)』馬場あき子/著 短歌新聞社 1981年
- 『新潮日本アルバム 24 与謝野晶子』入江春行/編 新潮社 1985年
- 『与謝野晶子(年表作家読本)』平野恭子/編 河出書房新社 1995年
- 『三省堂名歌名句事典』佐々木幸綱他/編 三省堂 2015年
- 『生誕140年 与謝野晶子展 こよひ逢ふ人みなうつくしき』公益財団法人神奈川文学振興会/編 県立神奈川近代文学館 2018年
- 「短歌研究」昭和 53 年 8 月号
- 「短歌」昭和 59 年 2 月号